

昨年春の同窓会総会において、同窓会名称が「鷗朋会」に変わり会誌名も「鷗朋」に変わりました。編集委員会では、これを機会に本冊子の目次下部に掲載しました若手OBを中心とした新委員会を組織し活動しております。

編集委員会では次に掲げる事項を目標に「鷗朋」の編集作業を行っております。

- ・同窓会情報の出来る限りタイムリーな発信を目指す。
- ・インターネットの同窓会ホームページやメイリング **kamome** とは異なる、冊子によって会員によりメリットのある会誌造りを目指す。
- ・この為に、年2回の「鷗朋」と年2回の「News Letter」発行を目指す。
- ・編集委員を増やし、各世代の声をより反映した会誌造りを目指す。
- ・以上により同窓会のより活性化を計る。

編集委員会にとっては非常に高い目標ですが、馬力のある若手編集委員の参画により必ずや到達可能と考えております。

会誌編集作業を通じて同窓会活性化のお役に立とうと、編集委員会では対話から生まれる新企画を考えております。会員各位のご批評、ご批判、こんなテーマを取り上げて欲しい等のご要望をどしどし会員の声として、また会員各位の自由投稿を事務局へお寄せ下さい。同窓会活性化の為に編集作業に参画し、編集委員として活躍頂ける方々も是非事務局へお申し出下さい。

さて、「鷗朋」第2号の特集では「学生生活の今昔」として、今では時効となった逸話を各期の元名物学生・豪傑による記事とその同窓OBによる記事とで構成しました。是非ご一読下さい。我こそは名物学生・豪傑の申し出がありましたら次号以降の連載も考えております。

同窓会は会員各位の年会費により成り立っております。会員各位が進んで会費を納めたくなる会誌を目指すので、皆様方の一層のご支援の程宜しくお願い致します。

編集委員長 岩崎 泰典(大学20期)

教室人事異動

- ◇ 勝井 辰博 助手
平成13年10月1日付けで助手に任用



私の学生時代—下宿・寮生活

大学19期 増山和雄

同窓会誌の重要人物であるらしい岩崎さん(大学20期)から「私の学生時代」についての投稿をお願いされた。今回の企画は私の学生時代の恥部を明らかにする事が主旨であるらしい。「時間が経ち、やっと忘却の彼方になったものをなぜ今頃になって掘り起こすのだ」とクレームしたが、「後輩のためという殺し文句」に負けて引き受ける事にした。学業そっちのけで学生時代を謳歌した者でも今日それなりに社会で勤まっている。この事が後輩の自信に繋がるのだという勝手な欺瞞的な理解をする事にして受諾する事にした。どうも他人に頼まれると NO と言えない、誘われると必ず付合う悪い性格が災いしている。

私は元々東京生まれの東京育ちである。大阪弁は今でこそ吉本興業の活躍もあり、全国的にポピュラーになったが、当時東京で大阪弁を耳にする機会は、渋谷天外・藤山寛美率いる松竹新喜劇のテレビ放映ぐらいであった。初めて大阪に出てきて環状線に乗った時、例によって電車の中でも大きな声で大阪弁でワイワイやっているのを座席から見上げると、あの松竹新喜劇の舞台の中に、突然放り込まれたかのような錯覚を持ったのが大阪での最初の印象であった。

一回生の時私は堺東と浅香山の間に位置する、手作りコロ昆布屋さんの二階の八畳一間に下宿する事になった。大家さんは40代の夫婦で、中学生の長男一人っ子とおばあさんがいる。下宿代は朝夕食付で確か八千円と安く、部屋も広く、おまけに面倒見の良いおばあさんの洗濯付きであった。しかし、食事のおかずは昆布屋というだけあって、いつも昆布が主であった。ある日大家の奥さんから「増山さんは昆布が好きね。」と言われ、「はい、ここの昆布はさすがおいしいですから」と答えたが、それしかないではないかと

いうのが本音であった。そのためかどうかは判らないが、入学時約62キロぐらいあった体重はみるみる54キロにまで落ち込んでしまい、銭湯の計りに乗るのが恐ろしく感じたくらいであった。しかし、今はなぜか73キロ順調に成長している。

食事問題回避のため、府大の学生寮に引越す事にした。引越し荷物は布団と少々の衣類、本棚ひとつである。車もない私は寮からリヤカーを借り、浅香山から大野芝まで自転車の後ろにリヤカーを繋ぎ、引越荷物を載せて府道を走った。府大の前辺りに差し掛かる頃、折悪くポツポツ雨が降り始めたが、構わず速力を上げて走った。その時、自転車の横を抜き去るトラックの窓から「頑張れよ!」と大きな声で激励があり、「アイヨ!」と答え、嬉しかったことを思い出す。

学生寮は小学校の廃校を連想させる木造建物で、南海地震により2棟が倒れ、幸い倒れずに残った2棟が、倒れ止めを施され寮として使用されていた。隙間風は言うまでもないが、石油・電気暖房器具は一切使用禁止で、炭火のみが唯一の暖房器具という凄まじい寮であった。食事問題回避で入寮したはずであったが、寮の食事は決して良いものではなかった。アイスホッケー部の晩練(夜間練習)の帰り道、付いてきた痩せた野良犬に寮の食事を与えると、臭いを嗅ぐだけで顔を背けられた。野良犬と一緒に夕食を楽しむつもりでいたが、結局深夜一人で冷め切った夕食を頂くことになった。

でもこんな寮生活にも晴れやかになる時があった。年一回行われる寮祭で近隣の女子大、看護学校から沢山の女子寮生が集まるのである。新入生は寮祭が近づくと毎夜先輩より社交ダンスの手ほどきを受けるのであるが、私は晩練のため手ほどきを受けられなかった。しかし、ダンスなんて抱

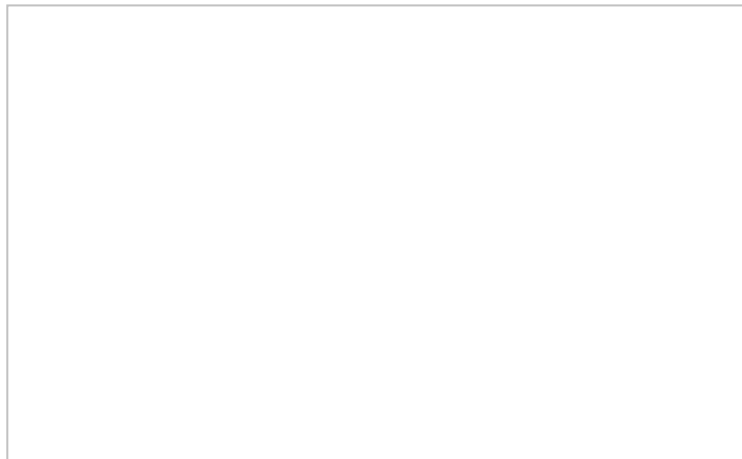
き合って、適当に足を動かせばよいのであろうぐらいの気持ちでいた。当日ダンス会場の講堂は、男の手だけでミラーボール・紙飾りで飾り付けられるが、薄暗いせいのみすぼらしい講堂も見違えるほどであった。私にとって初めての社交ダンスであったが、幸い相手もダンスが初めてだったので、気後れもせずリードして踊れた。と言いたいが、実はリズムに乗れず、最初から最後までどんな曲がかかろうと、唯一覚えたボックスとか言うステップだけを踏んでいた。時々足を踏み合ったりして運動会の2人3脚のイメージである。相手の足を踏まないようにすることに必死で、組み手が男女逆さまであることに気付いたのは、ダンスパーティーが終わりがけの頃であった。

こんな楽しい寮生活であったが、修士課程に進むのに合わせ再び堺東で下宿屋生活をはじめた。大家さんは高齢のご夫婦で、戦時中に総理大臣の視察が来る時には、宿泊先を提供するぐらいの由緒ある奈良県の庄屋の出であった。片山内閣の農地改革により堺に転出してきた方々である。その後片山さんという名前の人は嫌いであるらしい。田中教授が私の下宿に来られた時、「洗濯は増山にやらせたらどうですか」とおっしゃる先生に、「若い男性の下着を洗濯するのは私の趣味です」と返すような茶目気のあるおばあさ

んで、その後も卒業するまでずっと洗濯して頂いた。ある日「私の部屋でクリスマスパーティーをやるから、5-6人友人が来る」と伝えておくと、高齢にもかかわらず若い者が好みそうな料理を、なんと私に内緒で準備しており、当日びっくりさせられた事がある。下宿屋を引き払って東京に就職しても、欠かさず毎年私の誕生日にはおめでとうの電話を掛けて下さった。浅香山の昆布屋でもそうであったが、どうも私はおばあさんには良くして頂いた記憶がある。

学業については、船舶工学科卒業と言うよりもアイスホッケー一部卒業と言って良いくらいクラブに没頭していたので、正直サボったというしか言いようがない。そんな私なので4講座出身であるが、田中教授、姫野教授(当時講師)からは教え子としては認められる訳がないと思っている。しかし、私的な面では結婚式の仲人をして頂いた田中教授ご夫妻、妻と結ばれるきっかけ(姫野理論)を指導頂いた姫野教授に大変お世話になった。

今こうして学生時代の記憶を辿ると、如何に自分が周りの方々に支えられて生きて来たかという事を実感する。こんな自分を見つめなおす機会を与えてくれた同窓会誌の企画の方に感謝する次第である。



<後列2人目著者>



青年・増山和雄

大学20期 松浦 孝

昭和43年4月、私は至誠寮(学生寮)に入った。当時の至誠寮は木造2階建ての2棟から成り、寮生は全部で約80人いた。1年先輩の増山さんは、寮では目立った。寮生の大半は西日本の出身者なので言葉は概ね関西のイントネーションであるが、増山さんは大きな声で東京弁を話し、これが寮中に響く。横浜出身の私としては、まず言葉の点で親しみを持ち、以後、増山さんを追い続けることになった。

勉強面では増山さんのお蔭で楽をさせてもらった。増山さんは要領が良く、どの先生が出席率を重視するか、試験問題の傾向は何か等、よく調べていた。寮には優秀な先輩(現、防衛庁の山下真夫さん、府大教授の奥野武俊さん、木村隆男さん達)がいたためと思う。増山さんは諸先輩からの情報にさらに分析を加え、精度の高い情報を提供してくれた。例えば船体構造力学の予想問題は全問的中したと記憶している。私があまり勉強しないにもかかわらず一度も単位を落とさずに卒業できたのは増山さんのお蔭である。

増山さんはアイスホッケー部に所属し、2回生のときから早くもレギュラーの地位を確保したり、活躍はめざましかった。4回生のときは主将を務めた。体型もがっしりしていて、服を着ていると腹が出ているようにも見えたが実際には筋肉の塊であるという話を聞いたことがある。2年前にお会いしたときは、すっかりスマートになってしまって、当時の面影はあまり残っていなかった。

アイスホッケー部の練習は難波のアイススケートリンクでやるが、通常は一般客が滑っているため練習は夜の9時以降しかできない。したがって寮へ帰ってくるのは毎晩12時過ぎであり、勉強している姿を見たことがないが、いつどこで勉強していたのであろうか(失礼)。とにかく増山さんは要

領がよかったために成績も良く(また失礼)、大学院に進学することになった。因みに、4回生のとき某社からアイスホッケーの選手として就職するように誘われたが進学を理由に断った、と私は記憶している。まさに文武両道であった。

私は4回生になったとき、迷うことなく増山さんのいる4講座へ進んだ。当時の4講座の先生は田中紀男教授、姫野洋司講師、奥野武俊助手であり、学生には、修士課程1年の増山さんのほかに、修士課程2年に三嶋聡紀さん(現、三井造船)がいた。私の同期には岩崎泰典君(現、川崎重工)がいたが、1年後には池田良穂君(現、府大教授)、林田滋君(現、長崎総合科学大学)達が入ってきた。当時の4講座の学生のその後を見ると、博士号の取得率は非常に高い。

私は学部生のとき卒論のテーマとして、増山さんに付いて「船体の横揺れ」を選び、一緒に水槽実験をやった。曳引車を動かして模型船を引っ張り、種々の条件を変えながら船の横揺れを計測するのであるが、実験中は雑談をする時間がたくさんあり、色々な話を聞かせてくれた。例えば姫野先生の話。当時姫野先生はまだ府大に赴任してきたばかりで、学生気分も多少あり、増山さん達には貴重な体験談をよく話されたそうである。増山さんは、先生から口止めされているから絶対に誰にも言うな、と言いながら教えてくれた。阪大の学生時代に、下宿の部屋でウクレレを弾いていたら下宿のお嬢さんが掃除をしに入ってきたときの事件とか・・・これ以上は先生の許可がないと書けない。なお、そのお嬢さんとは今の奥様であるので問題はないかもしれない。

寮生はたいてい家からの仕送りもあまりなく、いつもお金に困っていた。ほとんどの寮生は日本育英会から毎月8000円の奨学金を借りていたが、それだけでは生活でき

ないのでアルバイトを沢山した。増山さんと一緒にやったアルバイトとして印象に残っているのは学校等の宿直である。あるとき、臨時の宿直で岸和田城に泊まった。城の周囲は堀で囲まれているし、大手門を閉めたらもう誰も侵入できない。月夜の晩、城内の庭園を殿様と家来の気分で散歩したりした。しかし、増山さんは落ち着かない。すぐに宿直室へ戻り、電話をかけ始めた。相手は彼女であった。どうして宿直のアルバイトをするのか、理由がわかった。彼女に長電話を掛けられるという大きなメリットがあった。その彼女は、「姫野理論」を駆使して口説いた今の奥様である。

しかし、他にも女性はいたようである。手縫いの浴衣をプレゼントされたこともあったようであるが、どうやって処分したのだろうか。その事件は確か今の奥さんと既に婚約した後のような気がするが、私の勘違いかもしれない。バレンタインデーにはチョコレートがたくさん届けられて、皆に配っていた。私も度々ご相伴にあずかった。

増山さんは、相手の女性に関しては年齢を問わない。修

士課程の2年目に寮から移った堺東の下宿でのことである。そこはお爺さんとお婆さんだけの家で、用心棒代わりに下宿したようである。特にお婆さんから可愛がられ、増山さんはよき話し相手になっていたようである。増山さんの部屋は2階にあり、裏庭が見下ろせる。ある夏の日のこと、お婆さんが裏庭で行水をしているところを見てしまったが、お婆さんは少しも慌てなかった。これ以上のことは、私は知らない。

私は増山さんが就職して下宿を出た後、入れ替わりでその下宿へ移り、修士課程の2年目はお爺さんとお婆さんの世話になった。夕方下宿へ帰り、「ただいま」というとお婆さんは玄関まで飛んで迎えに出て「わっ、増山さんが帰って来た！」とよく言われた。私の言葉のイントネーションが増山さんと同じなので、つい勘違いをしてしまうのである。私であることがわかるとお婆さんは「何や、松浦さんか。」と肩を落とすが、勘違いしたことをすぐに謝ってくれた。お婆さんは増山さんが下宿から出て行ったあとも、ずーっと恋し続けていたようである。

＜「鴉朋」第3号への原稿募集＞

☆ ご自由なテーマでお書きください ☆

分量：2000字程度を標準としますが、柔軟に対応します。

- ・原稿は、郵便(原稿用紙やフロッピーディスク)、ファックス、電子メールなどでお送りください。
- ・写真やイラストつきの原稿も大歓迎です。その場合、郵便で原本をお送りください。

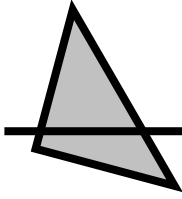
締めきり：平成14年5月17日(金)

宛先：〒599-8531 堺市学園町1-1

大阪府立大学工学部海洋システム工学科気付 鴉朋会事務局

TEL/FAX: 072-254-9914

E-mail: doso@marine.osakafu-u.ac.jp



私(ら)の学生時代

大学39期 橘 洋一

大学入学から考えると今年で15年しか経っていないにも拘わらず、いざ学生時代のことを書こうと思っても、なかなか記憶が蘇ってこない。つらつらと自分の周囲の人間との思い出と共に“私らの学生時代”について、思いだすままに書いていこうと思います。文中の人名は、その当時のあだ名(一部本名)で記載しています。

■昭和62年4月入学

この時代は造船不況の時期であり、船舶工学科入学に対しては周囲の人々から反対の声も挙がったが、私の祖父・父親ともに神戸のM造船所に勤務していたため小さい頃から船台進水を何度も見学しており「あんな大きな物を作ってみたいな」と子供心に抱いていたため、そんな声も気にならず入学を決心した。高校卒業から大学入学の期間に、三日間徹夜で麻雀をしたため、寝ぼけてトイレで頭を打ち十針も縫う大怪我をして、グルグル包帯巻き頭で入学式に出席した。その後の学科内の挨拶では、一発みんなにかましておこうと喧嘩で怪我をしたと大嘘をつきました。(同期のみんな、嘘でした。すみません。)

■大学一回生

私らの同期は、ここ数年ぶりのあくの強い人間が集まったと先輩らによく言われた。新入生歓迎コンパでは、酔った弾みでヒデ等数人で池で泳いだ。その後数年間それが船舶工学科のしきたりになったはず(今でも行われているのでしょうか?)。また、学外合宿に行った時には、ある神戸の女子大も泊まりに来ており、打ち上げ花火を武器に野武士さながら襲撃に行った。その時、3講座の北浦先生も酔った勢いで一緒に参加し、翌日女子大の先生のところに謝りに行ったと聞いている。

勉強面では、まだ一回生だったのでそれなりに真面目にしていた気がするが、思い出すことがあまり無い。ただ、高

校時代にはカンニングなんかしたことが無かったが、カンニングすることが当たり前のように先輩らに助言され、夜な夜な皆で下宿でカンペを作った。いつの時代もそうであろうが、僕らの同期も賢いグループとだめだめグループに大きく分かれていたが、賢いグループは嫌な顔もせずノートを貸してくれたり教えてくれたり、一致団結した良い同期だったと思う。とても感謝しています。(サンキュー！パパ・ママ・北川・坪郷・ひび。)

■下宿

初芝にある“新和荘”なる下宿にお世話になりました。私の実家は神戸で通学できるのですが親元を離れたいことと、また高校時代の大親友、大浜が同じ学科・下宿に入ることが下宿する大きな理由の一つでした。この新和荘には、船舶工学科の人間4人(私、大浜、八チャン、バカ)が下宿していましたが、実家・下宿に帰らず新和荘に夜な夜な泊まりこむ奴ら(ヒデお前だよ!)で船舶工学科だめだめグループの巣窟となり、他学科の人間を巻き込み下宿内の一大勢力“新和荘軍団”を築いていました。風呂は共同だったので、ある日、大浜・八チャンと入っていたら、八チャンがもじもじしているので注意して見ていたら、八チャンが大変な状況になっていました。思わずホモかと疑いましたが、面白くてすぐ大騒ぎ。八チャンは大へこみ(府大に入らなかつたら良かったとしみじみ言っていました)。この八チャンはとても気がよく、彼の部屋とその隣の経営工学科の原の部屋が

溜まり場となっていた。彼らにはプライバシーを全く与えず、上記のようなことになったと推測される。(たまた、鍵を掛けているときに有ったが、“ふぁー、寝とったー”と八チャンは(嘘を)言う。)彼のエピソードは一杯有りすぎて全部書けないが、彼は部屋にテレビも無いのにNHKの受信料を支払ったり、コタツ布団を新聞紙で代用したり(当然、たばこの火が着いて大騒ぎしたことも有る。)ホットケーキにキャベツを入れてお好み焼きと言いつ張るし、とても面白く気の良い奴でした。大浜も性格がとても良く男前で長身で、私が女だったらカモン！と言わずにはおれないような奴だったが、彼のおならは気分が悪くなるぐらい臭いのが唯一の欠点でした。彼のエピソードもたくさんあるが、一つだけ書くと、彼とヒデで原の部屋で爆竹の束に火を付ける真似をして原をからかっていたら、本当に火が付いてしまい、それをそのまま部屋の中に捨てて逃げ出した。廊下の隅から爆竹の音が鳴るのを30秒ぐらい聞いてから部屋に戻ると、原がぼーと放心状態でベッドに座り、頭の上に爆竹のかすが乗っていた。(今思い出しても笑える。)

個人的には、よく麻雀をしたくらいで、どこに行くのでも新和荘軍団で常に行動していた。

■大学二回生・三回生

大分、学生生活も落ち着き、皆自分のペースで学校生活を送り出し始め少しずつ個々に行動し始めた。思い出と言えば、ドイツ語の試験。私らは、航空工学科と合同だったのですが、試験中に先生が、“こら、そこ！”と一喝した。すると一斉にところどころでカサカサ、クチャクチャ、カシャと、カンニングペーパーを片づける音。試験後、先生が皆の点数を口頭で発表していきましたが、私らは3点、5点、10点等悲惨な点数で、さすがに航空の奴らは、皆高得点だった。(バッチシやと言っていた浅田。たった、5点やないか!)また、気の弱そうな白の(府大)犬がいたので、眉毛を書いて学園内のヒーローにしてやったこともあった。また、学食のテーブルにあるソース・醤油・ドレッシングを八チャンの鞆にこっそり入れ、鞆の中がどろどろになったことがある。しかし、八チャンの部屋にはドレッシングがかなり蓄えられ、野菜不足の下宿生にはそれらは重宝された。坪郷の鞆にもラインズ

用のおもり“くじら”を大量に入れたこともあったが、ひ弱な坪郷では重すぎて肩が外れそうになっていた。

個人的には、女の子からみで下宿を引き払い神戸の実家に戻ったが、新和荘にはよく行った。また、この時期から通学途中にフリー雀荘に出入りし、武者修行を開始した。

■大学四回生

私は四講座に入り、担当の先生は奥野先生でした。優しいからあまり昼には学校に行かずパソコンゲームをしに夜に行くのがほとんどだった。ある夕方、どこからか聞こえる笛の音に大浜・あきチャンと大騒ぎになった。奥野先生の部屋を開けるとリコーダーをくわえる先生が居て大笑いし(“なんや、おまえら!うひゃ!どひゃ!!”)、後日実験用のパテで笛をくわえる奥野先生のフィギアを作った。なかなか好評で今でも写真を持っている。また、夜毎、大浜・ヒデと奥野先生の部屋に忍び込んで、パソコンの画面にいたずらをし、奥野先生をからかった。先生は、手を横に振りながら”うひゃ、どひゃ“と言いつながら校舎内をよく追いかけて来て、捕まえられては体を触られセクハラされた。

また、KFRか何かの学会の後で、阪大生と合同で飲み会をし、素っ裸で踊った。(就職後、阪大の奴とこの話で盛り上がったこともある。)

また、清水が酔っぱらって大学の校舎内で車の運転をして側道に前輪をはめて横転した。それを見ていた奴らはびびったが、本人は血みどろになりながらもイエーと言いつながら上機嫌で車から出てきた。

曳航水槽にはドジョウを放流したこともある。高松先生と一緒に居るときにドジョウが息を吸いこ上がって来てちよつとびびったこともあったが先生には気付かれなかった。また、二講座の鹿取が排水バルブを“開”の状態にしたまま、帰宅し次の日水槽に水が一切無く大騒ぎした。皆で水槽の底を清掃したり電車の調整を実施した。(但し、ドジョウは発見できず。)ただ、鹿取はあまり気にしていなかった気がする。

二講座と言えば、夏の講座旅行で花火大会をしたらしい。ロケット花火や15連発花火を武器に陣取り合戦をし、パパが被弾した。服が燃えて、TVで見る兵士のように砂浜をごろごろ転がって火を消した事件もあったらしい。

個人的には、上述のようにあまり学校に昼行かず、卒論の発表前に少しがんばっただけの気がする。また、何故か修士課程に合格し進学することになった。

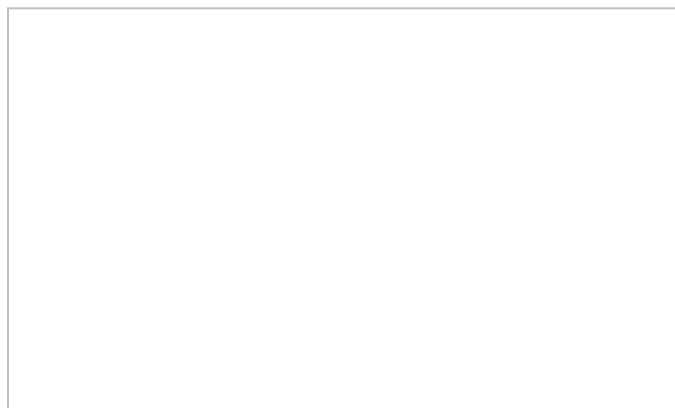
■修士課程

奥野先生が優しすぎるから、私が甘えていると言われ、担当先生が池田先生になった。しかし、池田先生になったからと言って、急に昼間学校に来るはずもなく、相変わらずの生活だった。池田先生からはよく怒られ、“おまえのその目が嫌いだ！”と飲む度に言われ、ちよつとムツとしたが、犯罪を犯すと実名が乗るのでグッと我慢した。2年目になると、今度は池田先生から体育会系・大塚スパルタ塾に入れられた。大塚先生は飲むのが大好きでよく飲みに誘われたが、説教されるのが分かっていたからよく断った。(すみません。)スパルタ塾に入ったからと言って、これまた急に生活態度が変わるはずもなく少しは改心したが大きな変化は無かった。大学院には、新和荘軍団が八チャン以外おらず、また講座も違うためほとんど個人で行動しており、“おねーちゃん”と“麻雀”に熱を入れていた。麻雀では、質の悪い店に入り有り金全部取られた思い出もあるが、北海道・東京・名古屋・広島・博多・鹿児島と麻雀武者修行に行き、やっていけると確信し麻雀で食っていこうと思う時期もあった。また、従兄の仲間らとお見合いパーティを主催し、情報雑誌に載せ商売

として本格的にやっていた。今思うと多くのおねーちゃんらと仲良くなり、かなり得した時期で懐かしき良き時代である。後輩には勉強は教えられないが、恋の相談(特に堀内)に乗った気がする。また、片山(現先生)ののろけ話もよく聞かされた。今思うと後輩とは仲良くしていた気がする。冬には、全講座の有志を集めてスキー旅行の企画をし、それ以後数年間そのツアーが継続したと聞いている。(今でも続いている?)

■最後に

現在は、子供の頃の夢を追って、造船会社で基本設計・計画の仕事に従事しています。給料は全く高くなく、将来も厳しいと言われている業界ですが、個人的には日本はやはりメーカ無しでは成り立てない国と考えており、だから、メーカである造船会社に入ったことは後悔していません。逆に40代の中間層の先輩があまりいないため自分なりに考え・責任を持って仕事が出来、新しいことも提案でき日々楽しんでいきます。しかし、よく言われることですがやはりもう少し勉強しておけば良かったなーと今更ながら反省することが多く、このような学生時代のいい加減な自分を見直せるチャンスを与えて下さった同窓会誌・事務局の方々に深く感謝致します。ありがとうございました。



北前船の盛衰

造船3期 大島 日吉

北前船とは、江戸期から明治中頃までに、北海(蝦夷地)や奥羽、北陸から漁獲物、特産物、米などを大坂や瀬戸内に運び、帰りには近畿、瀬戸内の特産物を持ち帰った北国の船の事である。(北陸の研究者による説)しかし、北の物産を積みれば北前船と広く解釈している者もある。「北前」の語源は、蝦夷松前の略称とか、北米(キタマイ)の転化とか諸説がある。

船は 500 石から 1,500 石積み、1,000 石前後を積むものが多かったので、「千石船」とも呼ばれた。

北前船は、時代の流れと共に、変わっていった。

最初、北国の大名が大坂へ米を運ぶのに利用し、西廻り航路(日本海から瀬戸内海に入る)を開いた。後、近江商人が蝦夷地まで北前船を使って進出し、海産物、皮革、金などを内地に回送するようになったが、これも西廻り航路をとった。

さらに時代が下ると、近江商人に限らず北陸の回船業者、上方や瀬戸内の業者も加わり、船も次第に大型化に向かった。

こうして北前船は、北海道の函館・江差・小樽・釧路・根室等で荷物を積み

込んだ。主な積み荷は、ニシン粕(しめ粕)、ニシン、数の子、コンブ、イワシ粕、サケ、タラ等で、特にニシン粕は、肥料として大きな需要があった。

北前船は、数十隻が船団を組んで、海岸沿いに日本海を南下し、下関から瀬戸内海に入り、目的地の大坂、瀬戸内の港を目指した。北前船には、それぞれ得意先があり、帰り荷を積む予定もあって、寄港地が決まっていた。

1672年(寛文十二年)江戸商人・河村瑞賢が、徳川幕府の命を受けて、出羽(山形・秋田県)の幕府領地の年貢米を輸送する為に、西回り航路を開発し、北海道、東北の日本海側と瀬戸内海を結び、大阪へ向かう航路が整備された。18世紀後半、この航路に民間商船として北前船が活躍し始める。

主に、北陸の船主達が持つ弁才(ベザイ)船(大型の和船)が使用された。7~8月に北海道で捕れたニシン、サケ、昆布を満載して出航し、秋に瀬戸内海や大阪で売りさばく。翌春、木綿、酒、塩、砂糖、ロウソク等内海の特産物を仕入れて、北の海に戻って行く。「一年一航海」だ。

「一航海一千両」(今なら数百万)と言われた船の莫大な利益のシンボルは、加賀市の「北前船の里資料館」に見られる。資料館は、旧北前船主・酒谷家の邸宅で、加賀市が譲り受けたものだ。だが、酒谷家の「幸長丸」でも、1863年(文久三年)には、831両の利益があったが1867年(慶応三年)はわずか18両で、浮き沈みは酷かった。

「資料館」の展示品の中に、備中寄島(寄島町)の満(ヨロス)問屋や備前日

●千石積みの船の寸法●

長さ	80尺 (25.0メートル)	船/容量ハ、約 1,000 石. (1石ハ、10立方尺)
敷(船の底)の長さ	48尺(14.5メートル)	
肩(船の幅)	24尺(7.3メートル)	
深さ	8尺8寸(2.7メートル)	
帆	26反	
櫓	16挺	

比(玉野市)の塩問屋の「引き札」がある。北前船の多色刷りのちらし広告で、寄港・取引を願って船主に送ったものだ。

幕藩制社会の流通経済は、大阪に集まる物資を江戸に輸送することで成り立っていたが、北前船は、違っていた。沢山の荷物を無事運送すると同時に、自分で品物を仕入れて売り捌く商才が、必要だった。「買い積み船」ならではの特徴であった。

江戸～大阪は、信用取引も出来る近代的経済システムだったが、北海道では、現地取引であった。一介の船乗りでも、うまく行けば船頭になり、自分の船を持てる可能性が開けていた。

江戸時代後半に花開いた北前船も、明治 30 年代になると、その船影は歴史の視野から消えて行く。

- ・汽船の台頭と鉄道網の発達
 - ・北海道と瀬戸内の相場差益の縮小
 - ・肥料用ニシン(綿の肥料)の需要減少等
- などが、衰退の原因だ。

山形県酒田市飛鳥の客船帳(1818～1830・文政期)には、

① 備前船として、12 隻

☆児島郡小串村(岡山市)の「大神丸」。

☆野崎浦(倉敷市児島)の「富久丸」等など。

② 備中船として、7 隻

☆倉敷村(倉敷市)の「春日丸」。

島根県浜田市外ノ浦の客船帳

(1744・延享元年～明治 34 年)には、
☆尻海(邑久町)の 35 隻。

☆下津井・吹上の 18 隻。

☆玉島・乙島(倉敷市)の 18 隻等の船名と帆印が記載されている。

下津井の背後には、広大な干拓地が広がり、綿が栽培されニシンのシメカスが、一番良い肥料で、北前船の重要な寄港地であった。年間50～60隻が寄港し、明治初年に亡くなった地元の老婆の話では、最も多かったのは、83隻であったと。そして一取引が千両になるものがあつたそうだ。

干拓地の塩分を含んだ砂地では、栽培出来る作物に限度があつたが、綿は水分と肥料さえあれば十分で、その上砂地の塩分を少なくする働きがあり、現金収入の魅力もあつた。収穫されたワタの花(綿花)は加工されて繰綿、綿糸や反物、衣服、帯、紐、足袋等の製品になり、北前船の「帰り荷」の一つになった。こうして北前船の来航が、児島の繊維産業発展のきっかけとなつたのであろう。

下津井・祇園神社の境内には、「加州橋立浦納屋太四郎」名の玉垣や「加賀瀬越村広福丸喜平」奉納の石灯籠がある。彼等は、石川県加賀市橋立町や瀬越町出身の北前船主だ。また、「下津井節」の元唄は、北前船の船頭が当地の芸妓に伝えたとも言われている。文人墨客の下津井訪問も多かった。海岸線に沿って両側に虫籠(ムシコ)窓、なまこ壁の古い商家が

続く約 4 キロの1本の道の街・下津井に往時の繁栄が偲ばれる。こんな港町の古い町並みは、下津井、鞆の浦など僅か数ヶ所に残るのみである。

玉島でも多くの北前船が、入港して高梁川の「高瀬舟」と結びついて、活発な取引が行なわれた。玉島には、赤澤家の”万吉丸(マンヨシマル)”等があつた。なお、赤澤家の現在の当主は、6代目の赤澤実氏である。

<付記>

十里港と五里港

瀬戸内には帆船時代の航路を示す言葉として、十里港と五里港と云う言葉がある。その時代の一日の航程は約十里で、十里港が主要港で、帆を休めた。五里港は、その間にある避難港で、鞆、下津井、牛窓、室津が十里港であつた。

北前船の商い

普通の回船では、運賃積み(運賃で利益を得る)であつたが、北前船では、買い積み(船頭の才覚で、積み荷の商品を高値で売捌き、得た代金で次の商品を買次(次の港で売り渡す)で、商才があれば、利益が利益を生んだ。

一航海千両

上りと下りの収入の合計が、ほぼ千両に近くなるが、費用を差し引くと八百両から五百両で、事故にあつた場合は、利益から修理費を負担した。

[終]

冰山を飲んでみた

～なかもず会講演レポート～

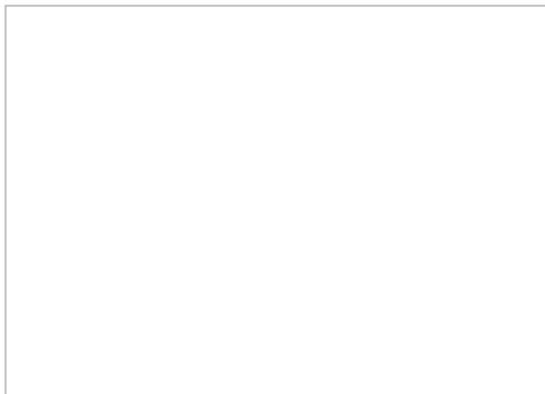
大学 40 期 六城 雅敦

前回の紙面では、府立大学の同窓会ではどのような活動をしているかを紹介しましたが、ちょうど元造船技術者の先輩である稲垣夏郎氏のご講演があったので、内容を簡潔にご紹介します。

■H13 年 10 月度なかもず会講演内容■

氷山の成り立ちは雪が 1200m～3000m 程度積もったもので、氷山自体は毎年 1 万個生まれるそうです。(大きな物は航行安全のため衛星で追尾されているのでご安心を)氷山のスペックは空気が含まれているため比重 0.92、極地での海水の比重は 1.027。これより計算すると「氷山の一角」を1とすると、水面下にはだいたい5～6 倍の体積となるそうです。このような数値がすらすら出てくるのはさすが元造船技術者です。天然水は大別して、ミネラルウォーター(硬度 100 以上)とボトルドウォーターとなるそうです。硬度とは Ca、Mg の含有量で日本の水はだいたい 20～50 程度(軟水)に対し、ヨーロッパ産の水はほとんど硬水だそうです。ただし流行の海洋深層水は硬度 1000 だそうです。

さて冰山はどうかというと、ほとんど純水に近い成分となり



ます。当然無味無臭、ガス成分なしとのことで、水割りにとても相性がいいとのこと。不況感にも拘わらず、1995 年頃からペットボトル需要は右上がり。(毎年 15%の成長、現在市場 950 億円)仕事柄、水に関わる事業なのでカナダのニューファンドランド島より天然水ボトルの輸入事業を始められたとのこと。その名もそのまま「Iceberg Water」です。

さて日本では食品衛生法上、輸入許可を取るのが時間がかかり苦労されたそうです。昔フランスが貿易障壁だとさんざん叩いたようですが、いまでは 500ml の外国製 PET ボトルが氾濫している状況です。枝葉末節にこだわる役人が一方でいる反面、すぐにザル法となってしまう二極化を面白く話されました。

さて、本来の稲垣氏は水中作業の技術コンサルタントです。造船会社での水中翼(貫通型)設計の経験が浚渫用のエジェクター設計に役立ったそうです。話を伺いましたが、エジェクターというノズルが内部に組み込まれたパイプに圧搾空気を送り、泥・岩を吸い上げるそうですが・・・とにかくそんな話でした。

稲垣 夏郎氏 (S40航空工学卒)

日立造船で水中翼船、コンテナ船の基本設計に携わる。以後海洋科学技術センター出向。水中作業、特に浚渫ポンプ、機器のエンジニアとなる。現在、東京新橋で技術コンサルタント会社ネイテックシステム取締役

大学の独立行政法人化について

北浦 堅一(海洋利用システム講座)

国立大学や公立大学を含め大学の独立法人化を文部科学省が推し進めている。この事の発端は国家公務員の定数を減らすことが目的である。その標的が大学に向けられた。裏を返せば国の政策失敗の被害をまともに受けた。政府は許認可権を盾にすべての業種をコントロールし保護してきたが、ここに来て過去の政策の矛盾が一気に噴出した感じがする。言い過ぎではあるが、特に土木関係に多額の税金を投入し、それに値する経済効果はほとんど無く税金を無駄づかいしただけである。国が独立法人化を推し進めると、地方公共団体で台所の一番苦しい大阪府もすぐに「府大学あり方検討会議」を13年2月に設置し、8月に中間まとめが発表された。テーマは「21世紀にふさわしい府大学像～改革を迫られる大学のあり方(仮題)」である。しかし、この検討会議には府立大学関係者は一人も入っていない。当然と言えば当然かも知れないが、この時点で大学側はいつも設置者に対して「大学自治の尊重」を言い続けてきたことが何だったのか空しい。そのあり方検討会議の中間報告が8月に示された。その目次は、〇はじめに、〇第1章 なぜ今大学のあり方か(1. なぜ今大学のあり方か、2. 社会経済情勢の変化、3. 社会が求める人材象～大学への期待)、〇第2章 公立大学の存在意義(1. 公立大学の存在意義、2. 公立女子大学の存在意義)、〇第3章 府大学のめざす教育・研究について(1. 府大学のめざすべき方向、2. 府大学の教育研究の基本的性格)、〇第4章 府大学のめざす運営・環境について(1. 府大学の運営のあり方、2. 府大学の教育研究環境のあり方)、〇第5章 結語 である。これらの内容を要約すると、はじめでは検討会議が設置されたいきさつが述べられている。やはり、大阪府の財政危機が背景にあることが明らかになった。また、納税者へのアカウントビリテ

イをきっちり果たし得ることを念頭に置きながら議論してきたとある。しかし、公共事業に対して常にこの事を念頭において行なってきたか、おおいに疑問である。検討会議の中間報告の内容はすべて、府財政危機を背景とする府財政改革の観点からの事務局の説明と提案によって議論が進められている。また、始めから大阪女子大学の廃止を念頭において議論が進んでいるように思えてならない。

結論から言えば大学の法人化を行えば今の授業料(年間約50万円)は私学(医学部約1,000万円、理工系約150万円、文系約100万円)並に上がるのは目に見えている。奨学金制度が充実していない日本では医学部や理工系の大学には裕福な家庭の者しか行けなくなる。学費に費やす親の負担が増え、ますます少子化になっていくだろう。

国や府において議員にとって大学がいかに関わろうともマイナス要因にはならない事が今回の大学改革を加速させているようである。後世この改革が日本にとって取り返しのつかない結果になるであろう。

それでは、どうすれば良いか、私の初夢は次の通りです。

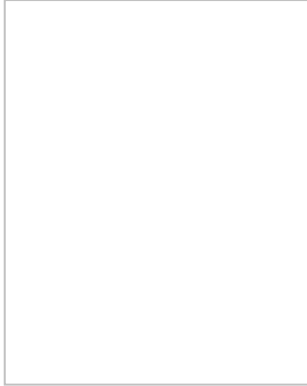
今独立法人化をしても近い将来また見直す時期がくると思う。今、法人化と言わず大改革を行なった方が良い。その改革とは 1)義務教育を終えた学生には高校、大学への入学を認める。2)授業や演習はすべて、ネット上で行う。もちろん質疑応答も同様である。実習のみ大学で行う。3)卒業単位を取得した者には日本国高等学校卒業、日本国大学卒業の証明を与える。4)博士課程の教育研究のみ定められた大学で行う。

この改革案であればいまのような受験競争はなくなり国民の教育費の負担も少なくて済む。



新任のご挨拶

海洋システム工学科助手 勝井 辰博



昨年 10 月 1 日より、工学研究科機械系専攻海洋システム工学分野海洋利用システム講座の助手として着任いたしました勝井辰博(かついときひろ)と申します。大阪府立大学という場で研究と教育を行う機会を与えていただいたことを大変嬉しく思っています。また私は大阪府立大学の卒業生ではありませんが、この伝統ある鷗朋会に入会させていただき大変光栄に思っています。若輩ものではございますが、諸兄の皆様のご指導とご鞭撻のほどよろしく願いいたします。この場をお借りし、鷗朋会のみなさんに簡単ではございますが自己紹介をさせていただきたいと思っております。



●生まれ

1971 年生まれで、奈良県橿原市で育ちました。有名な大和三山の一つである耳成山(みみなしやま)のすぐ近くに実家があります。今でもほどほどに田舎のよい町です。父は中学校の教師(もうリタイアしていますが)、母は専業主婦の家庭で、3 歳年上の姉が一人おります。

背が高く、体格もがっしりしているが、内弁慶な子供。今から考えるとそんな感じだったでしょうか。中学校まで地元で、高校は大阪の私立明星高校に通いました。カトリックの学校で比較的厳しい学校です。月に 1 度、頭髪検査なるものがありました。明星中学校と合同で行う体育祭は結構盛り上がり、各クラスで畳9畳分の応援看板を作ります。高校2年生の時に私がリーダーになって看板を作り、第1位をもらったのがよい思い出です。

●学生のころ

1 年間浪人して、1990 年に大阪大学工学部船舶海洋工学科に入学。環境工学を希望していましたが、かなわず第3希望の船舶海洋工学科に、船舶工学を学ぶなんて考えもしていなかった私ですが、その後博士後期課程修了までの9年間もお世話になることになりました。鈴木敏夫先生の研究室に配属になり、松村清重先生に直接研究のご指導をいただきました。学位論文は「滑走艇の未定浸水面問題に関する研究」。滑走艇は航走時の浸水面がわからないという流体力学的には面白い性質を持っています。この問題に対する新しい随伴変分原理(流れが前後非対称な流れに適応できる変分原理)を構成し、浸水面を求められることを示したものです。もっぱら紙と鉛筆で行う研究でしたが、研究を通して、物事に取り組む時の意気込み、あきらめないということがどんなことなのか、多くのことを教えていただきました。今の私の財産だと思っています。

●家族

話は前後しますが、私は博士後期課程在学中の1996年に結婚しました。私は学生でしたから、妻が働きながら私の学生生活を支えてくれていました。後期課程3年の時長女が生まれ、2人ともいわゆる‘プータロー(無職)’の時がありましたから今から考えると無茶(わがまま)をしたものだと思います。これも私や妻の両親をはじめ支えて下さった方々のおかげだと思っています。昨年の8月には長男が生まれ、今は4人家族です。

●就職

博士後期課程修了後、日本鋼管株式会社に就職しました。

当時すでに年齢は28歳ですし、子供はいるし、ということで同期入社の中では異色の存在でしたが、津にある研究所に配属され大阪府立大学に赴任するまでの2年半の間、商船の性能評価の仕事をさせていただきました。上司や先輩に多くのことを授けていただきました、一人前になって会社に貢献する前に退職してしまいましたので、大変申し訳なく思っていますが、これからよい研究、教育を行っていくことが恩返しだと考えています。

簡単ですが、私の自己紹介とさせていただきます。今後ともよろしくお願いいたします。

退職のご挨拶

事務局 太田 裕子

鷗朋会ホームページでもすでにお知らせいただいていますように昨年9月末をもって事務局を退職いたしました。

この度後任を引き継いでくださることになりました前川めぐみ様のお手伝いとして、今春3月まではまだ週1日程度こちらに伺っておりますが、早いもので3月もいよいよ後わずかとなり、この場をお借りして「退職のご挨拶」をさせていただくことになりました。

何から書こうかと何日もずっと迷い続けておりましたが・・・、やはり私には皆様に心からのお礼を申し上げたいということばかりです。

同窓会員の皆様、先生方、職員の方々、学生さん方にもいつも暖かくご親切にいただきまして、14年にもわたる長い間事務局のお仕事を楽しく続けさせていただきました。厚くお礼申し上げます。

事務の仕事も全く経験がなく、家には一応パソコンやワープロはあったものの当時私は全く触ったこともなく、ない

ないづくしで専業主婦歴だけはどっぷり10年近く、「ほんとうに私でよろしいんでしょうか」と不安なまま初めてこちらに伺ったのは昭和(!)63年11月でした。「大学の先生」のもとのお仕事ということで内心かなりびくびくし極度に緊張していた私でしたが、ほんとうに優しく暖かく迎えていただき、パソコンも一から教えていただきました。

また数々の失敗や不手際にもかかわらず会費の振込み用紙等に暖かい励ましや同窓会ニュースの感想などお寄せいただき、何度も繰り返し読んで元気をいただきました。ほんとうに心から皆様方に感謝申し上げます。

私自身も昨年なんと25年ぶりに大学のクラス会が催され残念ながら出席できませんでしたが、近況報告を読んでその瞬間学生時代へタイムスリップしてしまいました。高校時代の同窓会も今は2年に1度あり、また毎年同期生によるミニ講演会も行われ、結構活動をしています。時間に多少余裕の出来てきたここ数年前からのことで、やはりある程度年

齢を重ねると一番輝いていた - と今になっては思われる
- 青春時代が懐かしくなるのだと思います。実際には傷つくことや恥ずかしいことも多かったとしても今では心から懐かしい・・・, そんな時間や空間を共有できた人たちとの再会やかかわりあいを時を経てもなお持てるのは幸せだと今、素直に思えます。そのような同窓会のお手伝いをささやかながらもさせていただけましたことをとてもうれしく幸運に思います。

最後になりましたが、事務局になくはならない「同窓会

データベース」のシステムを忙しい時間を縫って整備・改良していただきました大学 40 期杉井康彦様, 大学 42 期脇本恭輔様, 現 M2 山崎祥司様, 現 M1 村山真也様, ほんとうにお世話になりました。ありがとうございます。また, 前川めぐみ様にはいつも遅くまで残って今回初めての編集作業を遂行していただきました。皆様どうぞ前川様を応援してくださいよう私からもよろしく願い申し上げます。

皆様方のご多幸と賜朋会のますますのご発展をお祈りし、心より厚くお礼申し上げます。

ごあいさつ

事務局 前川 めぐみ

昨年 10 月より、賜朋会事務局のお仕事を引き継がせていただいております。

私が初めて海洋システム工学科にお邪魔したのは、平成 10 年 1 月のことでした。「大学の先生」にお会いすると言うので、ただでさえ緊張気味で重い気持ちに、大雨が追い打ちをかけていたのを覚えています。(その後池田先生にお会いして、「大学の先生」に抱いていたイメージはかなり修正されましたが)

それから 3 年半。「大変そうなお仕事だなあ」と横目で眺めていた太田様のお仕事をまさか自分が引き継ぐことになるうとは、考えてもみませんでした。いざ始めてみると、やはり失敗ばかりで冷や汗ものの毎日なのですが・・・ともあれ、個性の強い方々のお話を見聞きできることだけを取っても、非常に楽しい職場であると思います。

まだまだ、力の足りないところも多いですが、新生・賜朋会と共に成長していけるよう、努力したいと思います。賜朋会の皆様には、今後ともよろしくご指導くださいますよう、お願い申し上げます。

『ある「へそ曲がり男」の落ちこぼれ日記』

次郎丸銀一（造船2期）著

265頁 定価(本体)1,100円 平成13年4月発行
文芸社 ISBN 4-8355-1597-8

終戦直後、習っていた空手の先生と「めっきは、本物に比べ、似て非なる違いがある。しかし、最後まで、めっきでも、本物として押し通せれば、本物と同じである」と議論したことがあった。

今更、言っても詮ないものの、努力、忍耐、勇気、決断力などに欠け、刹那的な気楽な人生を選んできた自分には、世の成功者が、一度以上は潜ったであろう修羅場の苦しみは分からぬ。

しかし、雑草は雑草なりに、現実はずべて正しいと受け入れ、後悔や愚痴は努めて避け、今日の日を少しでも有意義に過ごすしかない。

-----あとがきより-----

たまたま新聞で出版社の原稿募集の広告を見て、冷やかし半分に原稿用紙14枚の短編を送ったところ、出版業界不況の折、適当に煽てられ、とうとう恥を忍んで350枚余りの落第日記を書く羽目になりました。

出版社との契約はほとんど自費出版と変わりませんが、すでに同窓の数人の諸兄や会社員時代の同僚達にも読んで戴いており、数百冊は売れている由。ただし、中立的な立場より、旧勤務先その他の会社名は凡て省略しています。

資料皆無、記憶のみで書いたため、内容多少ずさんですが、大工専1期2期の委託生だった諸兄が参加された旧呉海軍工廠動員は、小さい範囲ながら当時の歴史の一つです。

本来、自分史は世の一定以上の成功者が出すもの、自分のように勤務先で上役と喧嘩ばかりの極めつけの落伍者が書くとは、まさに噴飯ものかもしれません。

-----著者コメント-----

●目次

- 第一章 鼻の曲がった先生
- 第二章 どうにでも着色できる時代
- 第三章 O 高等工業に入学
- 第四章 旧制O大、工学部に入学
- 第五章 大学は出たけれど
- 第六章 商社に入る
- 第七章 徐々に海外志向型に
- 第八章 再び東京での生活
- 第九章 会社を変わる
- 第十章 年金生活とアルバイト
- 付記 ニカラグアの「ゴキブリ」たち
- ニカラグア出張記 昭和四十四～四十五年

『日本の戦艦』

泉 江三 (造船4期) 著

上巻:A5版, 327頁 定価(本体)2,400円 平成13年4月発行

下巻:A5版, 323頁 定価(本体)2,400円 平成13年5月発行

グランプリ出版 ISBN 4-87687-221-X & 4-87687-222-8



本書は、これまで殆ど「軍極秘」という厚いヴェールに遮られて窺い知ることの出来なかった《旧日本帝国海軍主力艦の実態》を明らかにした「技術通史」である。

1945年の敗戦時には壊滅的な状態にありその再建すら危ぶまれていた造船業界は不死鳥の如く蘇り、僅々11年後の1956年に世界一の新造船建造記録を樹立したことは今なお語り草となっているが、この奇跡を生むに至った基盤には、幕末以降約100年の長きに亘って営々として築き上げて来られた先人達の不屈不倒の努力に加え、欧米(特に英国)からの温情溢れる配慮による指導と支援によって培われた日本海軍の近代造船技術の継承があったからに他ならず、その遺産を後裔である私たちは決して忘れてはならない。

こうした認識を基に書き進められた本書は、戦前シーパワースターの根幹として位置付けられた「戦艦」とは一体どんなフネであったのか、本書は諸先輩の歩みを《温故知新するためのガイドブック》とも云うことが出来る。

ただ、採録する艦艇を狭義の「戦艦」に限定すると1898年艦種類別制定以降のごく限られた隻数となるので、「明治・大正・昭和期の主力艦」のうち「戦艦・巡洋戦艦」に加え「装甲巡洋艦」及び戦艦の前身とも云える「アイアンクラッド・ラム」(衝角付き甲鉄艦)並びに「日清・日露両戦役の戦利艦」も併せ、幕末以後の主力艦を網羅的に取り上げている。

この著作『日本の戦艦』は、旧海軍の制式[艦船重量区分]に準拠し、上巻[327頁]:総論・船体部と下巻[323頁]:機関部・兵装部の2冊の構成としており、約1,600枚の図版・100枚の表などの資料を駆使しながら技術的な視点で詳細に亘って記述を展開したもので、その平易な解説は経験の深い艦艇設計技術者ならではのユニークな内容となっている。

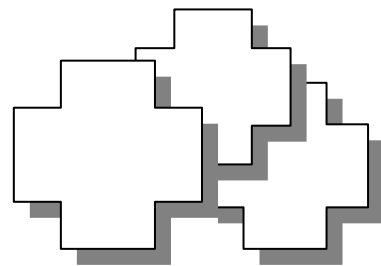
ここで注目して欲しいのは、上下巻2冊を通じてさり気なく採録されている図面である。その多くは公式図をベースに著者が作図した初公開のものであり、個々の解説・要目テーブルもまた著者独自の徹底した考証により新たに書き下ろされたものである。これらは何れも戦後刊行された類書には全く見られなかったもので、本書発行後の公刊書評には技術的に高い評価が寄せられている。

また、これまで部外者の知り得なかった裏話・秘話、例えば「甲鉄艦の詳細」「発見された畝傍の公式図」「薩英戦争と新式砲のアクシデント」「ユトラント海戦と日本戦艦」「日本海

軍のD級戦艦設計試案」などのエピソード、或いは「戦艦大和・武蔵の公式図面」などが要所々々に紹介されており、堅苦しい技術書というイメージからの脱却も配慮されている。



<行方不明になった「畝傍」の公式艦装図>



鷗朋会メーリングリスト「kamome」のご案内

卒業生の皆様、仕事先で、また、お家で電子メールのログイン名をお持ちになったら、早速、鷗朋会メーリングリスト kamome にご入会ください。

メーリングリストとは

特定の登録会員を対象とした、電子メールの配送システムです。

会員がそのメールアドレスに電子メールを送ると、登録した会員全員に電子メールが配送されます。

メールの表題には、特定の名称と通し番号が付けられます。

kamome について

これは、海洋システム工学教室の同窓会(鷗朋会)用のメーリングリストです。

会員は、現在 148 名程度。平均年齢は約 40 才?。同窓会員の動向、雑談、地区別同窓会の案内、外国旅行記、夫婦の対話など、気楽な話題で交流しています。

kamome の入会方法

下記のアドレスに、メールを送ってください。

doso@marine.osakafu-u.ac.jp

(今のところ手動登録です)

kamome に投稿するには

kamome@marine.osakafu-u.ac.jp宛てに、適当な表題を付けてメールします。

すると、表題の前に続き番号が付けられて、kamome の member 全員に配送されます。

返信も同様です。

同期生用メーリングリストの設定

同期生でメーリングリストを持ちたいときは、教室のサーバーにそれを設定させていただきます。鷗朋会事務局 までお申し込みください。

お問い合わせは、鷗朋会事務局まで・・・

E-mail: doso@marine.osakafu-u.ac.jp

URL: <http://msweb.marine.osakafu-u.ac.jp/~web01/ob/>

大阪府立大学オープンカレッジのご案内

大阪府立大学工学部では、平成14年6月2日(日)に高校生や大学入試を目指す方、高校教員を対象としたオープンカレッジを開催します。当日、午前9時～午後5時、大阪府立大学(堺市学園町1-1、地下鉄御堂筋線なかもず駅または南海高野線中百舌鳥駅歩15分、南海高野線白鷺駅歩10分)で、午前と午後2時間ずつ、各学科で体験入学や体験実験、研究室の見学などを行います。学部、各学科の説明会も行います。参加費は無料です。

申し込み期限 : 5月10日(金)まで

海洋システム工学科の体験実験は・・・

- (1) 小型水槽実験－海洋の重力流を再現しよう－
- (2) 海洋のリモートセンシング
－宇宙からの海洋観測－
- (3) 水質計測実験－海を救うために水質を計る－
- (4) 船舶性能試験
－波の中を進む高速船の運動を調べよう－
- (5) 鋼鉄をひきちぎる－こわれるしゅみをしらべる－

申込方法など詳しくは、

同大学工学部オープンカレッジ担当

(電話072-254-9202)

またはホームページ

(アドレス <http://www.eng.osakafu-u.ac.jp>) で。

日時:2001年12月12日(水)18:00~20:30

場所:たかつガーデン

出席者:

増田会長(大10), 定兼副会長(大15), 奥野副会長(大17) 蔵野(造1), 田中(造3), 保田(造3), 千種(造4), 外山(造4), 木村(大4), 岡本(大5), 山岡(大7), 城野(大8), 松岡(大9), 杉山(大12), 吉久(大13), 池田(大21), 岸(大25), 池田(大35), 吉野(大36), 有馬(大37), 山田(大37), 坪郷(大39), 片山(大41), 新井(大48), 手嶋(大48), 利根川(大49), 福川(大49)

以上27名(敬称略)

会長挨拶:増田会長より挨拶があった。

議長選出:定兼副会長が議長に選出された。

議事:

(1)報告事項

a)平成13年度会計中間報告

池田良徳理事より資料に基づき平成13年度会計中間報告がなされ異議なく了承された。

b)創立50周年記念事業会計報告

池田良徳理事より資料に基づき説明があり,異議なく了承された。

c)編集委員会報告

岸理事より資料に基づき,

- 1)編集委員長の「鷗朋」2号向巻頭言原稿
- 2)宅配便の価格調査結果
- 3)事業所別の集約郵便の検討結果
- 4)次年度編集関係予算申請(News Letterの発行)

について説明が行われた後,特に2)~4)についての議論が行われた。結果として,2)3)については,郵送の方法については,会の性格上会員個人に郵送するのが良いであろうとの意見にまとまった。

4)については予算計上の問題もあり,協議事項a)平成14年度会計予算案も参照しながら議論された。(最終承認事項は協議事項a)参照)

d)その他

・同窓会事務局として,長年にわたり大変お世話になった太田裕子様が退職され,代わって前川めぐみ様が就任されたことが報告された。

・姫野洋司教授が大阪府立大学総合情報センター所長に就任したこと,勝井辰博氏(元日本鋼管株式会社)が助手として着任したことが報告された。

(2)協議事項

a)平成14年度会計予算案に関する件

池田良徳理事より資料に基づき説明が行われた。説明の後,報告事項(1)-c)中4)次年度編集関係予算申請(News Letterの発行)について議論が行われた。主な意見は以下の通り。

・News Letter発行こともない平成14年度予算が収支マイナスとなるので,十分注意が必要。とりあえず次年度1年については発行してみて,それによる会費納入増加等をみてみてはどうか。

・編集委員長がやる気になって企画してくれたので,サポートすべき。

これらの意見をふまえ,編集委員会で再度検討をしてもらうこととなった。

b)新理事推薦に関する件

岸理事より資料に基づき説明が行われ承認された。

新理事:

大学30期 三宅成司郎氏, 大学33期 野口利仁氏, 大学47期 田角宏美氏

以上

平成 14 年度会計予算案

(H.14.4.1-H.15.3.31 単位:円)

収入の部		支出の部	
前期繰越	1,617,647	振込手数料	56,000
同窓会会費	1,600,000	通信費	455,000
理事会会費	25,000	役員費	727,200
		会議費	140,000
		事務費	60,000
		印刷費	375,000
		備品費	
		雑費	
		予備費	
小計	1,625,000	小計	1,813,200
		次期繰越	1,429,447
合計	3,242,647	合計	3,242,647

**平成 13 年度分
会費納入のお願い**

同窓会費をまだお送りいただいていない方はできるだけ早く同封の振込用紙にて納入下さいますようお願い申し上げます。(平成 14 年 2 月末日現在で未納の方には請求を同封しておりますのでご確認ください。)

毎回催促がましくご請求申し上げ誠に心苦しいのですが、何分本会は皆様方からの会費のみで運営いたしております。なにとぞ御協力のほどよろしくお願い申し上げます。